

史料紹介（石垣原合戦関係）

『豊国紀行』（一八九五年頃）

貝原益軒

研 修 部

実相寺山、里屋（亀川）の東に有り。昔はこの山に実相寺と云ふ寺あり。今はなし。東の麓に実相寺村あり。此山は慶長五年九月十三日、黒田如水の大友を打んとて宿陣し給ふ所なり。北石垣・中石垣・南石垣とて、実相寺村の南に三村あり。道の東の方にあり。此所を石垣と称せしは元より石多き所なれば、農人畠を作らん為に石をひろひて聚て積ししかば自ら石垣と成し故なり。（中略）

別府の西、廿九町に立石村あり。慶長五年石田治部昇輔亂を起せし時、前の豊後の国主大友義統は毛利輝元に組し此国に下向の時、九月十日、別府の南の隣村濱脇の浦に着船して、立石に宿陣す。黒田如水は豊後の敵を打んが為に、九月九日中津川の城を出、まず富来の城（恒見大和守が城なり）、安岐城（熊谷内蔵允が城なり）を巡見し、大友既に此国に下り

細川忠興の家臣松井・有吉などが籠りし木付の城に兵を遣して攻めよし「如水」聞給ひて、家臣井上・久野・野村杯を後攻め為遣はさる。大友の勢は、如水の出給ふと聞て木付の城をば巻はぐして立石の本陣へ退く。

是と見て如水より遣はされし木付の後攻の兵は戦ふべき敵なくして松井・有吉と共に先陣として大友と戦はん為、実相寺山の西、加来殿山に打かかりてしばらく陣を取、立石の方に向かふ。此山は実相寺山にはつづかず離れたる山なり。実相寺山との間八十間ばかりあり。其間を犬の馬場と云ふ。鉄輪村に行道あり。又イナフがババと云ふ。

大友方の兵も立石を出て鶴見原にて出あひ合戦す。黒田の一陣母里与三兵衛・時枝平大夫なりしが、大友の侍大将吉弘嘉兵衛が勢に押立てられ、実相寺山と加来殿山の間、犬の馬場まで引退く。

黒田方の二陣久野次左衛門は、若武者なれば一陣の敗軍を本意なく思ひ、鶴見原の半を過、立石に近き所迄進み、て宗像掃部と戦ひ討死す。

三陣井上九郎右衛門、野村市右衛門は、加来殿山の上、北の方低き所に陣を取てありしが、井上一人南の高き所より鶴見原の軍のよふを見て、時分よしと思ひ、士卒を呼びて野村

と同じく山を下りて敵陣に向ひ戦ふ。

鶴見原の半より南、立石の方によりて忠内ヶ堀とて自然の
から堀あり。横三間・長百間ばかりなるあり。是立石村と鶴
見村との境なり。是所の兩岸高さ一間半ばかりあり。其兩岸
に井上・吉弘立向ひて互に詞をかはして、後戦ひ吉弘遂に打
れぬ。久野次左衛門戦死の所より四町ばかり北の方にて敵陣
へも漸く遠し。されど石垣原の半よりは立石の方に近し。吉
弘打れしかば敵皆敗北す。

如水は其晩実相寺山に來りて陣を取給ふ。翌十四日大友方
に降参を進め給ふ。大友同心し十五日早天に如水の家臣母里
太兵衛が陣に降る。

○貝原益軒（一六三〇～一七二四）

江戸時代前期の儒学者・福岡藩士。『和俗童子訓』『養生訓』など多くの道徳的教訓書を著し、また本草学にも優れた業績を上げ『大和本草』などの大著を残した。『豊国紀行』は、主家黒田家の石垣原合戦の功業を検証する目的で豊後を旅したおりの紀行文である。

西遊雜記（一七八〇年頃）

古川古松軒

研修部

石垣原村をよぎりしに、此地は上古いかなる人の住居せし
所にや、爰もかしこも石垣を築きし所なり。土人の言傳もあ
らざれども、我日の本は九州の地よりひらけし国なれば、神
代と称せし数千年の古しへ、尊き人の居せし所ならんと察す
るもの外なし。

近き慶長年中、黒田如水と大友家の合戦ありし古戰場なり。
（中略）ひろびろとせし原野にて、如何ほどの大軍にても、
かけ引き自由のよき戰場なり。

吉弘嘉兵衛何がしといひしは、名高き武勇の士、しかも知
才ありて、大友石田に与力せる事をさまざまに諫言せしに、
大友愚将にて諫を入れず、主命いかんともなしたがたく、此地
において討死せし忠臣なり。今に墓ありて、往来の人此墓の
前は馬に乗らず、傍に下馬と称せる松あり。また吉弘長くら
べ石といふもあり、高さ六尺餘、雅なる石なり。吉弘の身の